
魔法少女リリカルなのは～神様冒険記～

三尾の狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜神様冒険記〜

【Nコード】

N8147S

【作者名】

三尾の狐

【あらすじ】

創造神の娘アテネに頼まれ異世界のモノからとある世界を守るように言われた神、天狐朱雀。守るよう言われたのは魔法少女リリカルなのはの世界だった。小さな神様が時にのんびり人生を楽しみながらがんばるお話です。原作ブレイクが嫌いな方にはお勧めできません。初投稿なので、キャラ崩壊、脱字、誤字等があるかもしれません。気が長に見えていただけると嬉しいです。

プロローグ（前書き）

初めまして三尾の狐という者です。

初投稿なので誤字などたくさんあると思います。そういったところを指摘していただけると嬉しいですよ。

プロローグ

「しゅっちよう?」

「うん、そう出張。下界のとある世界にね、異世界のモノが紛れ込んでね」

此処は神々のすむ世界『天界』。そのなかでも天使と上級神しか入ることを許されない『創造神の間』。そこで創造神の娘であるオレンジの髪に赤い瞳をして背中に天使の翼のようなものが生えているアテネに話しかけるのは、所々金色のまじった緋色の髪に赤と金のオッドアイで狐の耳と九本の尻尾をもった三歳ぐらいの少女、朱雀である。

「なんでわたし?ほかにもいるんじゃないの?」

「それが紛れ込んだものが魔界のものなのよ。中級神クラスや上級神でも低いクラスの神だと危なすぎるから上級神の中でも最上級の天狐族にきいてみたら貴女:『天狐朱雀』をつれていけて」

「わかった。おとーさんやおかーさんたちがいったのなら、すざく、いってくる」

「うん、ありがとう。お供にこの三人を連れていきなさい。向こうに着いたら使うといいわ」

そういって朱雀にアテネが渡したのは三枚のカード。

「それでFateって下界の漫画に出てくるセイバーとアーチャーとギルガメッシュが呼べるから」

なぜこのメンツかというアテネいわくセイバーとギルガメッシュは戦力面。アーチャーは戦力もあるがセイバーやギルガメッシュのストッパー役が本職だったりするらしい。だが、本当はおそらくただのアテネの好みであるだろう。

「それで、どこのせかいにいくの？」

「それはね……ジャーン『魔法少女リリカルなのは』の世界よ!!」

どこからリリカルなのはのDVDを取り出したアテネ。ここまですればもう分かると思うがアテネは下界の漫画やアニメのオタクだったりする。

「それってまえにいつしよにみた、しゅじんこうがにんげんにしては、きかくがいなアニメの？」

「そうそれ、貴女はその世界のとある重要人物に拾われる感じになるから。それと人間界に行くのだからある程度の制限がかかるから全力を出さないといけなくなったらこっちに連絡をお願いね」

「うん、わかった。じゃあそろそろいくね」

「いつてらっしゃい、がんばってきてね」

「うん、バイバイ」

強い光が朱雀を包んだあと、朱雀の姿は消えていた。

プロローグ（後書き）

改めまして三尾の狐という者です。

今回は設定などをしてそのあとからは無印編をスタートさせたい
と思っています。初心者ですが、よろしく願います。

オリキャラ詳細(前書き)

三尾の狐です。

今回はオリキャラの設定です。

オリキャラ詳細

主人公

天狐 朱雀

上級神の最上位である天狐族の末娘。天狐族当主は神族の王であり、朱雀は第五皇女。運命を司っている。

年齢 3454歳（神が視点では三歳程とみられる）

髪の色 緋色に金色が混ざった髪。（比率は緋色6：4金色ぐらい）

瞳の色 左目が赤、右目が金色

髪の長さ 腰ぐらいまでのロング。くくったり、まとめたりはしていない。

魔力量 EX（普段は制御しているためA+程）

魔導師ランク AA+

神力 SSS（普段はB程。魔力に変換できる）

妖力&霊力 SSS（普段はA程。魔力に変換できる）

属性 光、星、空

幸運 A

勘の良さ SS

動物に好かれやすさ EX

二つ名 獅子姫、神姫

口癖 みゆう

変換資質 炎熱、烈風、電気（電気はあまり使わない）

魔力光 緋色

武器 炎妖の扇子（公式上はデバイス扱い）、煌炎の扇子、斬魄刀
『星獅子』（始解は『燃えよ天空、凍てつけ大地「星獅子」』）

神器 運命の鐘（封印状態）

好きなもの 家族、ロイヤルミルクティー、油揚げ、甘いもの、はやて、寝ること

嫌いなもの 束縛、KY、睡眠を邪魔した者、辛いもの、悪

アテネに頼まれリリカルなのはの世界へと飛ばされた神。八神はやてに拾われ八神家の一員に。

司っているのは運命、能力はありとあらゆる奇跡を運命として他者にふりかけることができる。
自分を拾って、自分の正体を恐れなかった、はやてを気に入っている。

普段は三歳くらいで、家にいるときは耳と尻尾を出しているが、外

出時は当然耳などは見えないようにしたり、十五歳くらいの金髪で水色の瞳の姿になったり、中学生くらいの姿になったりする。この姿だと言葉もうまく喋れるようになる。正体は金色の狐の天狐。はやてが犬好きのため、子狐モードという変身魔法（命名はやて）を使うことができる。

病弱でよく風邪をひく。千二百年前、魔王に呪いを掛けられリミッターを無理やり解除しようとしたり、天界では七割、下界、魔界では三割以上の力を出すと高熱がでて、元より病弱なため三割の確率で死に至る。

天狐と鳳凰のハーフであり、天狐と青龍のハーフで腹違いの兄の『竜夜』が過保護を通り越しシスコンのため最近ウザく感じている。束縛を最も嫌い、本来の性格は自由を好む一匹狼。プライドが高く、他者に余り興味を示さない。

能力

運命を引き起こす

ありとあらゆる奇跡を運命として他者にかける。自分には効かない。現在、封印しているので擦り傷を治す、小銭を拾う、数分先に幸運を呼ぶ…ぐらいしかできないが、運命の鐘を使えば死者を生き返らす（死者蘇生）ことや、敵を一掃すること、大怪我を一瞬で治すなどが出来る。

未来予知（未来視）

その名の通り未来を予知できる。予知できる未来は、短くて数分後、長くて数年後ぐらい。

万物創造

見た物、触れた物、自分のイメージした物を自由自在に創ることができる。サーヴァントの宝具も可能。朱雀の場合、本来は生命を創りだすためのもの。

特殊変異物質完全制御能力

世界の常識を超えた物（ロストロギア、宝具等）を完全に制御することができる。

時空間制御能力

世界の時間、空間を完全にはいれないが、ある程度制御することが出来る。ただし、神界や魔界では使用できない。

主な技

狐火

一番よく使う技。様々な炎で攻撃する。普段は炎妖の扇子から撃ち出すが、素手や尾から撃つことも可能。

聖火

悪しきもののみを焼きつくす金色の炎。

星火

ありとあらゆるものを焼きつくし、灰へと帰すオレンジ色の炎。

狐舞

炎妖の扇子を使い、炎の舞を踊る。天狐族に伝わる舞。

炎鳥舞

煌炎の扇子を使い、風と聖火の舞を踊る。鳳凰族に伝わる舞。

聖なる祈り

光属性の技。呪いとは正反対の技で、祈ることで自らの能力を上げたり体力を回復することが出来る。

天への誓い

光属性の奥義の一つ。大量の魔力、神力を捧げることとどんな願いも叶えることが出来る。

英霊召喚

サーヴァントのクラス名が描かれているカードとそのサーヴァントの真名を言うことでその英霊を召喚出来る。

天狐 竜夜

朱雀の兄で第一皇子で皇太子。法と掟を司っている。

年齢 16232歳（神視点では十六歳ほど）

髪の色 銀色と青色が混ざった髪（比率は銀色6：4青色ぐらい）

瞳の色 左目が青、右目が銀色

髪の長さ 背中ぐらいまでであるが首の辺りでくくっている。

魔力量 EX（普段はAA程）

魔導師ランク AAA+

神力 S（普段はC程）

妖力&霊力 SS (普段はB+程)

属性 闇、夜、月

幸運 B

勘の良さ SS

動物に好かれやすさ D

二つ名 蒼き竜騎士、王子

口癖 むう…

変換資質 炎熱、氷結、電気、風

魔力光 瑠璃色

武器 水龍の鎌、聖水の扇子、斬魄刀『竜王牙』 (解号は『咬み砕け』竜王牙『』)

神器 掟の書 (封印状態)

好きなもの 朱雀、辛いもの、油揚げ、コーヒー、和食、栗

嫌いなもの 父、甘いもの、洋食、王

アテネにより下界へと送られた朱雀を追って下界に降りてきた神。法と掟を司っている。

あだ名はシスコン兄貴、シスコン皇子で、その名の通りかなりのシスコン。

とある事件以降父である『天狐雷空』が嫌いになり朱雀への過保護度はさらに上がった。

好きな食べ物は辛いもので嫌いな食べ物は甘いものだが、栗は例外のよう。

天狐と青龍のハーフの銀狐。人間時は十六歳ほどの銀髪の少年になる。

動物に好かれにくいため式神は少ない。

能力

掟の書

ある条件下のものを完全に操ることができ、裁くことができる。ただし封印中。

未来予知

その名の通り未来を予知することができる。予知できる未来は短くて数秒後、長くて数百年後。

オリキャラ詳細（後書き）

12月10日加筆修正しました。

一話 狐と八神家

サイド朱雀

「うーん…」

どこなんだろう此処。私がいるのはベッドだなく、見るからに此処は人間の家の二階っぽい。どこかで見たような…

『ゴメーン！』

『アテネ？』

思念通話をしてきたのはアテネ。

『えーっと今その貴女の力を封じてる首輪を使って会話してるんだけど…こっちに送り込むとき座標とかいろいろ間違えちゃって…空から落としちゃったというわけ』

いろいろ間違えるとか…神の神としてどうなんだろう……それでなんか腕に包帯が巻いてあるのか

『でも、ちゃんと保護者っぽい人は予定通りだから！それと、原作介入はして！というか絶対関わっちゃうんだけど…原作ブレイクもありだから！あと、出来る限り貴女の正体を知られないようにすること。とくにあの頭の固いKYとか。でも今貴女の保護者になっっている子とかは、貴女の判断に任せるわ』

『わかった。でもアテネ』

『ん？なに？』

『こんど、いつかいなぐらせて』

『なんで！？』

なんでって…いきなり空から落とされたら殴りに行くに決まってる。

『うっ…とりあえず言うことはそれだけだから！がんばってね！』

あっ、念話切っちゃったよ。とりあえず一階に行ってみよう。

サイド八神 はやて

家の前に倒れとった子、大丈夫かなあ。腕、怪我しとったみたいやけん簡単な治療はできたけど…

あっ！上から降りてきたみたいやね。

「起きたんやな。腕痛うないで？なんか食べる？」

あれ？なんで変な顔して立ちつくるとんやる？そんでなんか失礼なこと考えよる気がするんはなんでやる。

サイド朱雀

たしか…はやってっていうニンゲン。エースっていう話ではけっこう活躍や出番があったのにストライカーズっていうのになつたとたん凄く出番が減って空気となりかけていた子か。エース編では重要人物と言えるだろうけど無印編には出てこないし、ストライカーズでは空気だし重要人物なのかなこれ…

「えーっと…あなたが、たすけてくれたの？ニンゲンのおんなのこ」
「人間の女の子って…あんたも人間やないかい。それと私は八神はやてゆーんや」

やっぱり八神はやてだ。アテナはこの子達だったらばらしてもいいって言ってたし…よし。最悪、記憶消せばいいからいいよね。

「わたしはすぎくっていうんだよ、てんこすぎく。それにわたしはニンゲンじゃないよ」

ためしに耳と尻尾を出してみる。

「うわっ！これ本物！？じゃあ、朱雀ちゃん狐さんなん!？」

「うん、そう。こわくないの？しっぽが9ほんもあるんだよ、ふつうじゃないんだよ」

「怖いわけないやん。朱雀ちゃん優しそうやし、尻尾が九本あったってそれが直接怖いに繋がるわけやないんやし」

「…はやて、ありがとう。そんなこと、ニンゲンにいわれたのはじめて。…ニンゲン、みんな、これみるとにげる。おそってくるのもいる。だから、ありがとう」

少し笑ってみる。なんか、はやてがナニカを堪えてるっぽいけど…

「いやいや、そんな感謝されるようなことちゃうよ」（今の笑顔は不意打ちやったあゝ思わず顔に出てもうたゝ）

「わたしたち、はやてといっしょに、ここにすんでもいい？」

少し、単刀直入に聞いてみる。

「ええよ、私、一人暮らしやけんうれしいわあ！たちってことは、ほかにもおるん？」

「おねーちゃんとおにーちゃんが」

セイバーとアーチャーとギルガメッシュである。

「一気に家族が増えたなあ　ほんま、うれしいわあ！お姉さんとお兄さんは今、どこにおるん？」

はやての目の前で魔法やら妖術、使っても大丈夫だよね。人間からすれば私そのものが規格外だし、どっちにしろ、闇の書とかいうので知るんだし。

「はやて、これからすること、ひみつにしてくれる？」

「？ええよ、誰にも言わん秘密や」

呼び出し方は簡単。三枚のカードに契約者である私の息を吹きかけるだけ。本来、聖杯のバックアップとか色々なことがあって、初めて英霊はこの世に呼び出すことができるのアテネが言ってたけど、聖杯の代わりに私がその調整からなに行うことで、聖杯が無くても、英霊を呼び出せるということらしい。

「彼方かなたより此方こなたへ、我がもとに三人の英雄をここに」

カードに息を吹きかけると、三枚のカードから光が発せられる。光が収まってそこにいたのは、Fateでおなじみ、セイバー、アーチャー、ギルガメッシュの三人だった。

「あわわ…人が急に目の前に」

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上した」

「同じくサーヴァント・アーチャー召喚に応じ参上した」

「何故我が^{オレ}雑種と共に呼ばねばならないのだ。まあいい、サーヴァント・アーチャー召喚に応じ参上した」

「おつかれさま、アテネから話、聞いてる？」

「はい、聞きました。で、この者は誰ですか？」

はやてを指さしてる。

「は…初めまして。八神はやていいいます。えっと…貴方達は…」

セイバーとかじゃ変と思われるかもしれないから…

「ひだりから、アルトリア、シロウ、ギル」

簡単に言ってみた。

「アルトリアさんにアーチャーさんにギルさん…」

「さんはいりませんよ、ハヤテ。呼び捨てで構いません」

「うむそうだな、堅苦しいのは苦手だな」

「我の名はなぜ略されているのだ！この王たる我を！」

上からはやて、アルトリア、シロウ、ギルの順。

「はやて、こいし、ない？ただでここにすむの、はやて、めいわく
かもしれないから」

「そんなことないよ〜小石なら…はい、これでいい？」

そんなことないわけじゃないんです。アルトリアがいると、この家の
エンゲル係数がどうなるか…小石があれば、食費なんて軽く稼げる
んです。

「ありがとう、はやて（ニコッ）かずはらご。だいじょうぶかな」

はやてがまたナニカを堪えてるようだけど…あつ、シロウにギル
も。

「とりあえず…石に眠りし輝きの力、今ここに取り戻さん」

小石を包んでいた手を開く。五つの小石は小さいながらも一つの
光輝くダイヤモンドになっていた。

「じれって…」

「ダイヤモンドですね。小さいけれど不純物はほぼゼロといったと

「ころでしょうか」

「すごっ！！朱雀ちゃん、これほんまにダイヤモンド!？」

「（コクリ）…はやて、あげる」

「ええん!？ありがとうな朱雀ちゃん〜そや!家族が増えたことを記念してケーキ食べに行かんか?翠屋っちゅう喫茶店があるんや」

「ケーキですかっ!行きましようスザク。わたしはショートケーキがいいです!」

腹ペコ暴食王が動き出した…こうなったらもう私には止められな
いだろな〜すでにショートケーキを要望してるし…あの白い魔王の
ところだよね、

「わかった、行く」

「ほな、いこか〜」

いざ、魔王の地へ!

二話 狐と翠屋と神社（前書き）

今回、なのはさんと接触です。時間はなのはさんがフェレットユ
ーノを拾って、無印編が始まる日の夕方頃です。

二話 狐と翠屋と神社

? 翠屋?

サイド 朱雀

来ました、喫茶翠屋。アルトリアが目をキラキラさせていたりしているけど気にしない。ちなみにギルは、五月蠅いので若返りの薬で子ギル化。外出のため、私も耳と尾は消している。

カランコロン

「いらっしゃいませー」

エプロン姿で出迎えてくれたのは、なのは。ああ、これが後々に魔王と呼ばれる存在なのか…と、思ってしまった。中にはお客がけっこついた。

「アルトリア、ケーキは、ふたつまで」

一応腹ペコ王に釘を刺しておく。

「すいませーん。モンブランを一つと…朱雀ちゃんどうする?」

「シュークリーム…ふたつ。アルトリアたちは…」

はやてが聞いてきたのですぐに答え、英霊組にも聞いてみる。

「どれも美味しそうです。私はショートケーキとチョコケーキでお

願います」

「私はチーズケーキをいただきます」

「僕はフルーツタルトで！」

なのはの母の桃子が注文のケーキを皿に盛っていく。

「ちょっと待ってね……はい、ケーキ六個お待ちどう様 みんな可愛いわねえ。うちのなのはと同年くらいかしら？」

「なのはちゃんってあそこで注文をとったりしている子ですか？確かに同じくらいですねえ。」

「そうそう。あの子よ」

噂をすれば何とやら。なのはがこっちに走ってきている。

「お母さん！チーズケーキとプリン、注文はいったよ！」

「ありがとう、なのは。あなたもそろそろ休憩したら？そうだ！このお客さん達がいいんだったら一緒におやつにしたら？」

「私達は構いませんよ、な、朱雀ちゃん」

「（コクリ）」

「私達はアルトリアが暴走しないように見ているよ」

「僕も」

という感じで私とはやてと魔お…なのはで一緒におやつを食べる感じになった。

「今だれか魔王って言おうとしなかった!？」

地の文に突っ込まないでください。

「なのはちゃんも九歳なんかあゝいつしよやねゝ」

「はやてちゃんも九歳なんだ!朱雀ちゃんは幾つなの?」

えゝと…人からしたら私は三千は軽く超えているんだけど…とりあえず三本、指を立てる。

「三歳なんだゝはやてちゃんとは姉妹なの?」

「まあ、そんなもんやね」

「(モグモグ)」

あつ、このシュークリームおいしーな。二人が会話に夢中なうちにもう一個のシュークリームを私の創った異空間に入れておく。

「そういえば、朱雀ちゃんのその目ってカラコン?」

さりげなく、なのはの姉の美由希が聞いてくる。いつからそこにいた?さっきまで注文とったりしてましたよね。

「ちがう、生まれつき」

「珍しいね。天然の虹彩異色オッドアイなんて」

「きれいだよね」

「おかーさんのがあかくて、おとーさんのがきんいろだったから」

「「「へえ」」」

このあとは、なのはとはやてで色々話しを続けて、いつのまにやら友達に。

お話タイムが終わって帰るようになったのは一時間後。シロウ達の努力空しく、さりげなくアルトリアがケーキのおかわりをしていった。

カランコロソ

「ありがとうございました」

「はやてちゃん、朱雀ちゃんまたきてね」

なのはが手をブンブンふり、はやてもブンブンふって別れた。

「楽しかったなあ、なのはちゃんと友達になれたし」

「ケーキも美味しかったですね」

「このあとどうする？どこか行くとこあるか？」

「はやて。この辺で、いちばんおおきい、じんじゃってどい？」

「神社かいな〜あるよ〜。今から行くで〜？」

「（コクリ）」

「りょーかいや。シロウ君頼むで〜」

はやてがはやての車椅子を押しているシロウに道案内をしながら進んでいくと、大きい鳥居と神社に続いているであろう長い階段があった。

「ふむ、ここは車椅子を押しながらでは行けんな」

「ほなけん私この神社、上までいったことないんや」

「ならば……よつと」

シロウがはやてを抱えてアルトリアが車椅子を持って登って行った。

階段はけっこう長く一番上まで登ってきたが辺りには人っ子一人おらず神社の管理人すらいない。
社のほうむかしにいったみると…

「「グルルルル……」」

「な……なんや!？」

社の前にあつた石の狛犬が色を帯び、唸りながら困んできた。まったく。身分をわきまえない無礼者ですね。などと思いながら十五歳ほどの金髪に水色の目の少女になる。

「静まれ守護神どもよ。ぬし等の主殿はどこにおる」

「はいはい、ここでーす！」

そう言つて社から現れたのは、二十代ほどの黒髪の男性。

「あれ？朱雀様じゃないすか。どうしたんです？その英霊や人間の子供は」

「しばらく此処に住むことになったからの。此処の土地神のお主に言霊ことたまの加護を受けに来た。それからこつちの人間は八神はやてという。こつちで我が姉としておる。はやて、こやつは恵比寿。ここら海鳴の土地神じゃ」

「恵比寿つてあの神様の！？初めまして、八神はやていいます」

「初めまして、恵比寿です。一応この土地神で、朱雀様の部下つて感じかな」

「お主の上司は兄様で、私ではないのだが」

「下級神にとって上級神なんて皆、上司じゃないすか」

「だから違つと言つておろつー！」

このくだらない言い争いは、ハヤテや狛犬二匹に止められるまで

続きました。
(byアルトリア)

二話 狐と翠屋と神社（後書き）

次回、ついに無印編が始まります。初めから朱雀が原作介入する予定です。

感想お待ちしております。

三話 狐と魔法少女（前書き）

更新遅れて申し訳ありません！なかなか書けなかったのですが遂に今回、なのはが魔法少女になり、原作介入開始です。

三話 狐と魔法少女

「え〜っと土地滞在についての言霊ですね〜。じゃ、式神を全部出して下さいね〜」

「わかった。出てこい、しろつき白月、びやくが白牙、ひじり聖、おうが皇牙、みあつ美煌、アマテラス天照、こうらい光雷、びやくこ白虎、せいりゅう青龍」

空間が割れ、中から五匹と三人の式神が出てきた。青龍以外は皆、真っ白である。

「朱雀！遊ぼっ！！」

これは、尾を九本もった白い九尾の妖狐『白月』

「主殿、本日はどのような事でしょう」

礼儀正しい白いライオン『白牙』

「朱雀お姉ちゃん遊ぼ〜」

白い双子のレオポン『皇牙』と『美煌』

「どうしました？私達全員を呼び出すなんて」

竜神の中でも光属性、最高最上位の白竜『聖』

「朱雀様、何か御用ですか？」

上位種である麒麟の白銀種『光雷』

「私もですか…姫様どうしました？」

上級神の白く紅い模様が入っている狼『天照』

「何事だあ。俺等まで呼び出して」

中級神の白い虎『白虎』

「白虎、主には敬語といつも言っておるではないか」

白虎と同じく中級神の青い竜『青龍』

聖と光雷と青龍は人の姿となっている。

「おお！全員、光属性の式神ですか」

「これで全員だ。言霊を頼むぞ」

「わかりましたと。我、この地に留まることを許し、この地より汝に加護を授けよう」

朱雀と式神たちに恵比寿の手からでた光で左手に模様のようなものが浮かび上がる。

「これでOKっすよ」

「うむ、白月と白牙、天照のみ残り、後は戻れ」

朱雀が言つと白月と白牙、天照以外は全員その場より消えた。
朱雀も元の姿に戻る。

「じゃあ、かえる。はやて、いこ」

「うん。ほな、恵比寿さんさよなら」

「バイバイ」

神社に寄つた後はスーパーで晩御飯の買い物をしてから帰つた。
白月達は外でいる間はぬいぐるみそっくりな姿となつて朱雀とはや
ての腕に収まっていた。

? 八神家?

晩御飯を食べ終わり、そろそろ原作が始まるころ。はやてには、
散歩と言い抜け出てきた。アルトリアを屋根の上に待機させてお
き、準備完了。

元の姿に戻つた白牙の背に乗り、動物病院の方へと行く。白月は
万一のためにはやての傍にるようにしたので、連れてきた式神は
白牙と天照だけである。

なのは達が見える位置まで来てみると、原作通りレイジングハー
トを起動させていた。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約の下、その力を解き放て」

「契約の下、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

「この胸に。この手に魔法を。レイジングハート、セットアップ」

『stand by ready・set up』

桜色の光が空に向かって上がり、白いバリアジャケットを着たなのはが現れる。

「ふええ〜、これなに!？」

なのはが慌てているうちにもジュエルシードの思念体が襲いかかる。

私がこの世界に介入したり、魔族の影響で原作の思念体よりも格段に強い上に、三体に増えている。

『protection』

レイジングハートが防御しようとするが、このままでは防ぎきれそうにない。

「いくよ。白牙、天照」

斬魄刀を自分の異空間から取り出し、白牙に乗ったままなのはに攻撃している思念体に斬りかかる。

「あ…貴女は!?!」

「うるさい、イタチ。いまは、これをかたづけろ」

ポフンツと姿を中学生くらいに変える。

「なのはとイタチはそっちの一体をやるのじゃ」

「イタチじゃなくてフェレットです!?!」

ユーノが言ってくるけど完全無視。そんなこと言っているうちに、私に向かって一体が突進してくる。

「あ…危ないよ!」

なのはに言われ危ないのはそっちと思いつつも無言でトランプを取り出す。そのトランプに描かれている絵は剣使い^{セイバー}。

「クラス『セイバー』、真名『アーサー・ペンドラゴン』召喚」

トランプを宙に投げる。投げたトランプに赤い魔法陣が広がり、そこからアルトリアが出てくる。

「ふ…ふえええ!?!」

「これは召喚魔法!?!」

なのは何が何だかわからずパニックっていて、ユーノは近いことを言っているがなのはにだって、成長してもらわないと困るからあつちの一匹を片づけもらわないと。

「なのは、早くあつちの一匹を片づけるのじゃ！」

「う…うん。あれ？なんで私の名前を…」

「そんなことは後じゃ！」

どうやらなのは私が朱雀というのに気付いていないようだ。

アルトリアに一体を任して、私も突進してくる目の前の一体を見て、斬魄刀を構える。

「燃えよ天空、凍てつけ大地『星獅子』」

始解すると同時に二刀一対の刀となり朱と銀に煌めく炎と氷の獅子がジュエルシードの思念体に襲いかかる。

「アオーン！！」

それに天照がトドメをさし、ジュエルシードを回収する。アルトリアの方もなのはの方も終わったようだ。

「貴女は一体…」

「それより早く逃げた方がいいと思うのじゃが？」

「へ？…あつ！ごめんなさい！！」

遠くからサイレンが聞こえる。それにやっと気づいたのは達と一緒にその場から退散した。

三話 狐と魔法少女（後書き）

オリ主の斬魄刀についての説明です。

『星獅子』

解号は「燃えよ天空、凍てつけ大地『星獅子』」

能力は星やその光など夜に関係あるものの操作能力と天候支配能力。二刀一対の斬魄刀で始解すると同時に炎の獅子（雄）と氷の獅子（雌）が敵に襲いかかる。

具象化した姿は炎の獅子と氷の獅子の二体で人の姿にもなれる。炎の獅子が獅雷、氷の獅子が獅水。

自分の意思で具象化ができ、よく具象化している。

こんな感じですよ。卍解についてはもう少ししてからです。

四話 狐と少女とフェレットと

?公園?

「ここまで来れば大丈夫じゃろ」

「ゼイ…ゼイ…つ、疲れた…」

「ああ、主は運動音痴だったの。すまぬすまぬ」

「ふえええ、何で私が運動音痴なの知ってるんですか。というか貴女達は誰なんですか？」

「わからぬか？今日会ったばかりじゃぞ。そのイタチは知らぬがな」

「誰がイタチですか！誰が！！」

私のイタチという言葉に反応するイタチみたいなやつ。

「マスター、会ったときは姿が違つのでわからないと思いますが…」

アルトリアがもっともなことを言う。そう言えば忘れておつたわ（オイ

「あ…あれ！？アルトリアさん！？」

「はいそうですよ、ナノハ」

「そ、それじゃあもしかしてそっちの人は…」

「恐る恐るといった風にこちらを指さすのは。」

「うむ、これでどうじゃ？」

ボフンツと音を立てて、元の姿に戻る。耳と尾も出ている私の姿に今だこつちを指さしながら口をパクパクさせるのは。

とある弟子の一人が正体を明かすのは面白いと言っていたが、その通り（笑）

「え？え…朱雀ちゃん？で…でも狐さんで…あ、あれ？あれ？」

「つ…使い魔!？」

なのはは突然の出来事に混乱し思考回路崩壊寸前、自称フェレットなイタチはまったく的外れなことを言っている。とりあえず、まずはフェレットもどきの認識を改めさせてもらう。

「私は使い魔じゃない。アルトリアや白牙達のほうが使い魔、みたいなもの」

「みたいつて…」

「そんなことより、君の名前聞いてないよイタチ」

「そ…そう言えば私も…」

崩壊寸前の思考回路がやっと復活し、会話に入ってくるなのは。

「フェレットですつてば！…僕はユーノ・スクライアです」

「た…高町なのはです…」

ボフンとまた変身し、姿を変える。

「私は天狐朱雀じゃ。そしてこっちが私の使い魔と式神の…」

「アルトリア・ペンドラゴンです」

「白牙です。なのは殿」

「我は天照だ」

「ふえええ〜ライオンさんと狼さんがしゃべ…（プヒュ〜）」

あ、遂になのはの思考回路が死んだの。

「人間が素体の使い魔だって！？そんな不可能なこと…」

フェレットの言っていることを説明しておつたらかなり長引くのだが…

さてどうしたものかと考えていれば『ピリリリリ…』という音が鳴った。懐を探ってみれば私の携帯（前にアテネから貰った）からだ。発信先は八神家。

何事かと電話に出てみる。

「もしも【遅いぞ！！王たる我^{オレ}を待たせるとはいつたい何事か！！】

……」

こっちの言葉を遮って出てきたのはギルガメッシュ。

その怒鳴り声は電話越しでも辺りに響き、即座に耳から三十センチ程離れた。

ああ絶対ご近所迷惑じゃろうなあ〜と思いつつ周りを見るとアルトリアは呆れ顔でため息をつき、状況が飲み込めないのはとユーノは唾然としている。白月が八神家の周りに遮音結界を張っておることを祈っておこう。

「うるさいぞギル。仕方ないじゃろ」

【我^{オレ}に向かってうるさいとは何事か！とユーノか騎士王に変われ、騎士王に！！】

ちらつと騎士王ことアルトリアの方を向くと電話が変わることを断固拒否している。

何処から出したのか「そんなバカに付き合う暇はありません」とかいたスケッチブックまで取り出している。
まあ当然だが。

【ああっコラ！何をするか贗^{フェイカー}作者！！王の邪魔をするとは万死に値するぞ！！】

何やら揉めているようだ。とユーノかただ単に士郎がギルから受話器を奪い取るうとしているのだろうけど。

いけいけ衛宮士郎、負けるな衛宮士郎。そのままギルから受話器を奪えーと心の中で応援してみる。

しばらくたつと勝利したのだろう士郎たちが電話に出た。

【すまないなマスター。私達で止めようとしたが…今日一度も暴れ

ておらず、きかなくてな…】

【でも、うるさくてご近所迷惑な英雄王には少し沈んでもらったよ
ま、すぐ復活するだろうけど】

ふう…と、溜息をつきながら答える土郎とおそらくギルを足台の
かわりにしているであろう白月。

グッジョブじゃ二人とも。とりあえず、さっさと戻らないといけ
ないみたいで…

「うむ、では私達もすぐに戻るからの。もう少しだけその英雄王を
押さえておいてくれ」

【了解した。マスター】

【オッケーだよ！】

ピツと携帯を切り、クルリと後ろに振り返る。

「というわけじゃ。話は明日にしてくれんかの」

「え…あ、ああもちろんいいですけど…」

「すまぬの。詫びと言ってはなんだが明日、土産を持ってお主のも
とに行こう。では帰るぞ！アルト、白牙、天照」

「はい、マスター」

「了解しました」

ばつと白牙に乗り八神家の方へと駆ける。それにアルトリアと天照も続く。

「ではな、小さな魔法使い！」

大きく手を振りその場を去る。

帰ってあの英雄王を黙らせるにはどうしようか…などと考えながら夜を駆ける。

明日の土産はどうしようかな

四話 狐と少女とフェレットと（後書き）

ハイ、短いですね。長々と引きずった割には短いわ内容薄いわ。こんなのですがこれからも見ていってくださる方がいるのなら頑張りたいと思っています。

朱「うむ。そうでなくとも頑張るのが作者の務めぞ」

うおおう！？どっから湧いたんですか貴女！？

朱「湧いたとは失礼な。それよりさつさと次を書かぬか、ホレ」

えつと…今テスト期間中で今回投稿するのも大変だったんですけど…

朱「何じゃ、だらしない。それくらい気合いでやらぬか」

気合いって…そういう問題じゃないと思うんすけど。

朱「しかたあるまい。出来ぬというのなら、私直々に灸を添えてやるつ」

え？

すざくのこつげき

すざくはきつねびをくりだした

ちよっ…なにこのRPGゲーム風の文は！？って、ぎゃあああああ

あ…！

さくしやに350000のダメージ

さくしやはたおれた

朱「うむ、これに懲りたらさつさと次を更新することじゃな。これを読んでる者達。最後までこんなにグダグダで申し訳ないが、これからも見ていってくれると嬉しいぞ。では、また次回で会おうぞ」

（作者を引きずりながら退場）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8147s/>

魔法少女リリカルなのは～神様冒険記～

2011年12月11日20時52分発行